H13.10.25

予防的措置が功を奏したアレルギー性鼻炎

千葉　　竹之下　信一

本症例は一年中の中で特定の時期に現れるアレルギー性鼻炎である。来院時は発症時期に無く、症状も無かったが、患者の要望により予防的治療を行なったところ、例年に比し軽い症状で済んだものである。

症例：11歳　男性　小学生

初診：平成12年12月11日

主訴：例年春先に現れるアレルギー性鼻炎に対し事前の治療による症状の軽減もしく発症の抑制。

現病歴：1歳時に喘息を発症し、現在症状は出ていないが、薬は服用している。

2〜3年程前から、鼻汁、鼻閉塞、眼の掻痒感の症状が徐々に強くなってきている。症状は春先(2〜4月)に集中しており、他の季節では、全くみられない。ここ2〜3年の症状出現中は、発熱・のどの痛み・咳等はなかった。

病院のアレルギー検査では杉、ハウスダスト、ネコ、イヌ、ダニに反応がでたが、スギ花粉の反応が特に強く出た。

昨年は病院で12月〜4月の間症状の軽、重に応じ週1回〜月1回の割合で花粉症の注射を受けたが改善はみられなかった。

症状が強くなると顔色が真赤となり、睡眠障害へと到ることもあった。鼻汁は膿性の悪臭のあるものではない．頭痛はない。のどの違和感もない。

スポーツは水泳を週1回。塾は週2回。現在は鼻汁・鼻閉感・眼の掻痒感等の鼻炎症状は全くでていない。肉が好き。

既往歴：喘息(1歳より)

家族歴：祖父が喘息

診察所見：身長143cm、体重50kg、やや肥満型、顔色はやや赤味を帯びている。　口唇は白黄色で乾いている。舌苔は薄白色で、外側が裂けている。身体は触診すると全体に硬い(肩上部、下腿)。上半身は下半身に比し皮膚温が高い。鼻汁はみられない。圧痛はふくらはぎ下部全般。

診断：症例は気管支喘息の既往があり、アレルゲンテストによりスギ花粉が最も強く出ていることが判明しており、鼻汁、鼻閉塞、眼の掻痒感の症状からアレルギー性鼻炎と診断する。(但し来院時にはその症状はみられなかった。)

※参考：病院での診断もアレルギー性鼻炎である。

対応：アレルゲンテストによりハウスダストや動物の毛やダニなどに反応はしているが発症の時期が2〜4月ということであり、スギ花粉によるアレルギー性鼻炎です。

治療により自律神経のバランスをとり、血液循環を良くすることにより症状の出現を軽減できるものとおもわれます。

治療・経過：治療はアレルギー性鼻炎の予防を目的におこなった。患者は鍼灸に対し恐怖心を抱いているということで、接触鍼(バネ式小児鍼)を中心に、カーボン灯を用いることとし、鍼灸治療に対する恐怖心を除去することに努めた。

治療体位は横臥位で恐怖心を抱かせぬよう治療が見えるようにし、リラックスさせるようにした。部位は委中、大椎、上脘、合谷、太谿の接触鍼。黒田のコーケントーによる光線治療(3001番—3001番)で足底・膝・腰を各5分。後頭部・眉間部各3分。

生活指導：アレルゲンの発生を少なくすることが大切ですので、家の絨毯等の掃除は丁寧に行って下さい。イヌ・ネコの動物はご家庭内で飼育しないでください。食事は野菜と魚(特に青魚)を多めにバランスの良い食事を心掛けて下さい。風邪をひかないように気をつけてください。

第3回(12月25日)上半身の皮膚温の熱っぽさが無くなってきた。
口唇の乾きもうすれる。

第4回(1月13日)本日風邪気味という。鼻閉あり。

第5回(1月18日)前回以降鼻内部の掻痒感あり。
(程度は昨年の最悪時に比し1/10程度)

第7回(2月5日)鼻汁は止まっている。ふくらはぎの圧痛は初回程ではない。

第8回(2月12日)少し鼻汁が出ている。上星を治療に加える。

第9 回(2月20日)鼻閉塞、眼の掻痒感は1度も出現していない。

第10回(2月25日)鼻汁、鼻閉は落ち着くが、2月23日に突然、眼の掻痒感出現。

鍼灸治療への恐怖心もなくなり、本人の申し出により、ディスポ鍼　寸3—01番により切皮程度の鍼治療を行う。

(10回目の治療後、3日程顔が赤くなり、ほてる状態が続いた後症状は落ち着く。その後眼・鼻の症状は殆どでなか

った。)

第 11 回(4 月 22 日)4 月 15 日頃より鼻閉が強くなり来院。初回時に比し顔の赤味は薄い。ふくらはぎの圧痛も弱くなっている。

第 12 回(4 月 30 日)鼻閉もとれ治療を終了とする。

考察：本症例は気管支喘息の既往があり、アレルゲンテストによりスギ花粉の反応が顕著であった。発症の時期が毎年 2〜4 月とスギ花粉の多い時期と重なり、発熱はなく頭痛・膿性の悪臭のある鼻漏もなかった。鼻汁・鼻閉塞・眼の掻痒感が症状である。

以上の理由からアレルギー性鼻炎と診断した。

診察所見・現病歴・ここ 2〜3 年の症状から以下の類症疾患を除外した。

1　風邪：発熱はない。咽喉の痛みもなく頭痛・関節痛もない。

2　副鼻腔炎：頭痛はない。憂鬱などの精神神経症状も認められない。　膿性の悪臭のする鼻汁ではない。頬部や鼻根部の疼痛・圧痛はない。

3　血管運動神経性鼻炎：症例の患者は 11 歳であり、青壮年ではない。アレルゲンが判然としている。

4　非アレルギー性好酸球鼻炎：2〜4 月に限定されるアレルゲンが判然としている。

本症例は春先から春にかけてのスギ花粉によるアレルギー性鼻炎であるが、治療を重ねるにつれ、血液循環の改善が進み、顔の赤味が薄れふくらはぎの硬さがほぐれていった。

事前に予防的措置をとることにより前年に比べ 1/5〜1/10 の症状にとどめることができた。一般に対処療法的治療が主であるが、鍼灸治療による血液循環の改善・自律神経の調整に努め、事前に着手すれば鼻汁・鼻閉の苦痛も軽減できるものと思われる。

参考文献：医道の日本

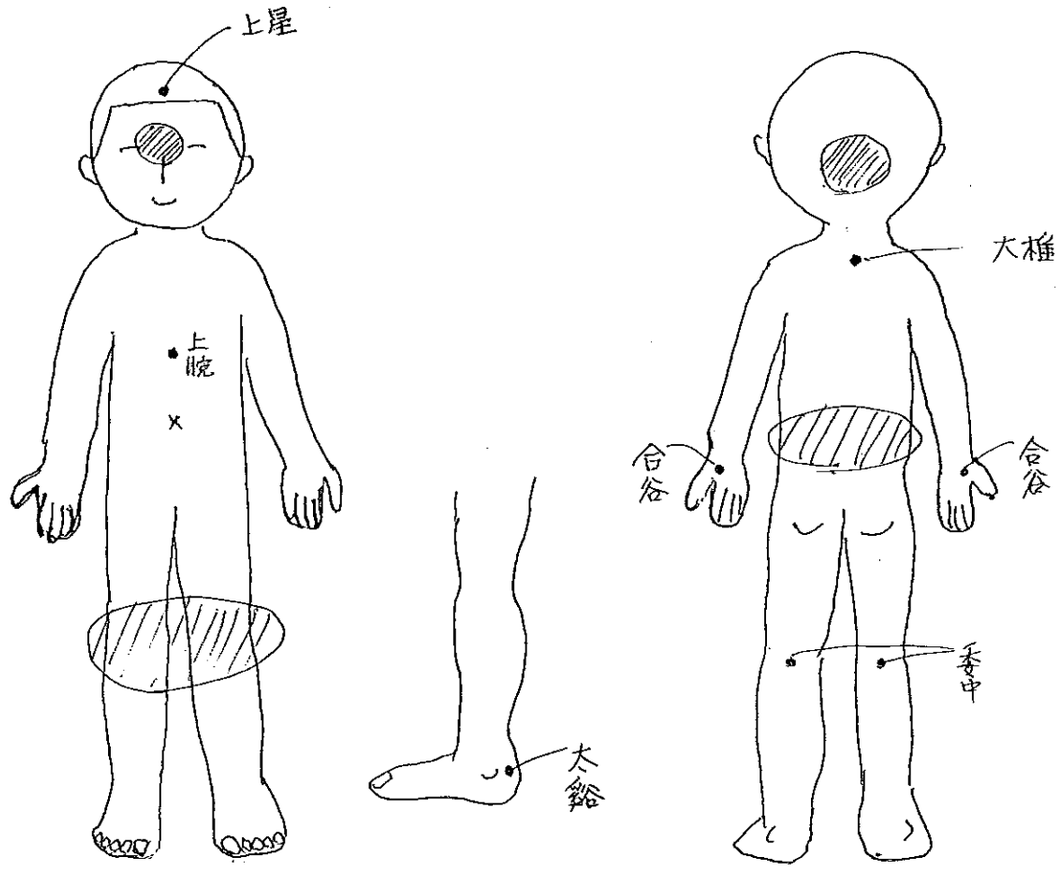
1995 年 11 月号　加島　郁雄「症例報告(54)アレルギー性鼻炎」

1996 年 4 月号　「特集―臨床でてこずる疾患③アレルギー鼻炎」

1997 年 4 月号　崔遠・田邊　紀雄「中国鍼による通年性アレルギー性鼻炎・副鼻腔炎治療 15 例の結果報告」

1998 年 6 月号　二木　清文「花粉症の治療」

1999 年 1 月号　西田　皓一「アレルギー性鼻炎」

2000 年 2 月号　二木　清文「花粉症の治療(その 2)」

2001 年 5,6 月号「特集・座談会―鼻・喉の疾患の診断と治療」